



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	直示と参照に基づく「前（まえ）」と「後（あと）」の意味分析
Author(s)	山下, 好孝
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 26, 141-152
Issue Date	2018-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68748
Type	departmental bulletin paper
File Information	141-152_Yamashita.pdf



直示と参照に基づく「前(まえ)」 と「後(あと)」の意味分析

北海道大学国際連携機構 国際教育研究センター 教授
山下 好孝

Semantic Analysis of Japanese Expressions MAE and ATO from Deictic and Contextual Points of View

YAMASHITA Yoshitaka

abstract

In earlier papers (Yamashita [2016a], Yamashita [2016b]) I proposed the need for a contextual and deictic approach in Japanese syntax. In this paper I analyze the temporal expressions MAE and ATO from the same point of view.

Contextual use means that an expression needs to be interpreted with respect to a reference point in order to be understood appropriately. The Japanese expression ~NO MAE-NI presupposes that the noun which precedes it functions as its reference point.

1) Hirugohan-no mae-ni sensei-ni au.

"Before lunch, I will meet the teacher."

The main action "au (to meet)" occurs before the lunch. In this use we can say that MAE expresses the past. This type of expression is contextual.

On the other hand, in the following sentence MAE expresses the future.

2) Mae-ni mukatte susunde ikou.

"Let's go forward."

In this case, MAE is used from the speaker's point of view, and we say that this use is deictic.

~NO ATO-DE and ATO have the same contextual and deictic uses.

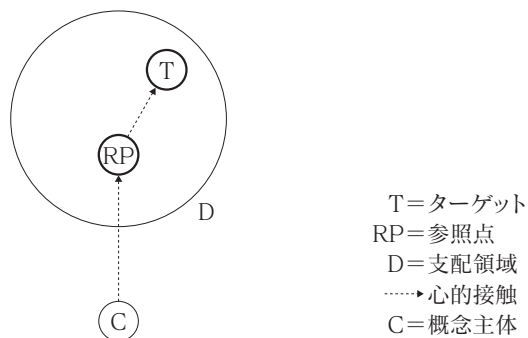
We can also observe the contextual and the deictic viewpoints in English expressions like BEFORE - AFTER, and AGO - LATER.

1 はじめに

筆者は山下（2016a）において、直示と参照に基づき、「右、左」「これ、それ、あれ」等の分析を行った。そして「右、左」には話者の視点から現象を叙述する直示的な用法（deictic expression）と、何らかの参照点（reference point）を通して表現する参照表現（contextual expression）の用法があることを論じた。

参照表現というのは、ある事態を表現するのに何らかの参照点が必要なものを指す。これはおおむね次のように図示できる。

■図1 参照点と参照表現



辻編（2013：132）

「これ、それ、あれ」などの日本語の指示詞に関しては、「これ」「あれ」が直示表現であるのに対し、「それ」は参照点を必要とする参照表現であると主張した。そして、「それ」系指示表現の参照点として、「先行文脈」「指差し」等の注意を喚起する行動「聞き手の領域、および聞き手の思考内容」があげられることを論じた。

山下（2016b）においては、「内（うち）」と「外（そと）」「だけ」と「しか～ない」の違いについて考察した。日本語の「内、外」の表現は直示表現であるのに対し、中国の「内、外」はある表現の「全体」を参照点とする参照表現であることを明らかにした。また「だけ」の表現には、ある集合を前提として含意しなければ用いられないことを明らかにし、「しか～ない」表現にはそのような前提を必要しないことを論じた。言い換えると「だけ」はある集合全体を参照点とする参照表現であり、「しか～ない」はそのような参照点を必要としない直示表現であると見なすことができる。

これら二つの視点は、程度副詞の分類などにも適用できる。寺村他（1987：90）では程度副詞に次の2種類のものを設定している。

(1) Aの系列の程度副詞

- [4] a 一郎の部屋はかなり広い。
 b 二郎の部屋はわりあい広い。
 c 三郎の部屋は少し広い。

(2) Bの系列の程度副詞

- [5] a 花子の部屋ははるかに広い。
 b 花子の部屋はもっと広い。
 c 花子の部屋は一層広い。

そして、Bの系列の程度副詞は、二項の比較という個別的な程度で一方の側より大であることを示すとしている。つまりBの系列の副詞は他のものを参照点とする参照表現であるということである。

本研究ノートは時間を表す「前（まえ）」と「後（あと）」という表現を取り上げる。そして、これらを直示と参照という観点で意味解釈を試みる。「前」という表現が「未来」を表すのか、「過去」を表すのかは日本語の学習者にとって興味深い話題であろう。これら二つの見方には、参照点が設定されるかどうかによることを論じる。それと同じく「後」が「未来」を表すのか、「過去」を表すのかも同じメカニズムで理解できることを本研究ノートは明らかにする。

2 前(まえ)と後ろ(うしろ)

時間関係を表す「前（まえ）」と「後（あと）」を扱う前に、場所を表す「前（まえ）」と「後ろ（うしろ）」を取り上げる。両者を比較すると「前、後」等が表す時間の概念は抽象的なものである。これは「前、後ろ」等が示す空間という具象的概念から派生したと考えられるからである。

大野（1978）によると「前（マエ、古くはマヘ）」の語源は「マ」と「ヘ」の複合語であるとする。「マ」は「眼」を意味し、「ヘ」は「端っこの場所、中心から外れた場所」を言う。従って「マヘ」と複合した形式は「面前」「前面」「前部」を意味する。そして具体的な知覚できる場所の意味から抽象化された時間の意味が派生したと考えられている。

現代の日本語では「マエ（マヘ）」は「ウシロ」の対である。しかし大野（1978）によると、昔は「マヘ」は「シリヘ」と対になっていた。「シリヘ」の「シリ」は「尻」であり、「シリヘ」とは「尻の方」という意味である。そして「ウシロ」とは「身後（ムシロ）、身尻（ムシロ）」から生まれた言葉で、結局「尻」と同じ意味であろうとしている。

「前、後ろ」は空間的な場所を示す場合、参照表現として使われる。

■図2 「前」と「後ろ」



(3) 箱の前にボールがある。

(4) 箱の後ろにボールがある。

上記の2例では、「箱」が参照点として機能している。さらに、次のような例文もある。

(5) 私は（運転手は）ハンドルの前に座った。

この場合、「前」は「ハンドル」を参照点としている。決して「私の前」という意味ではない。

しかし、参照点が明示されない場合は、森田（1989）が言うように「主体の視線の向かう方向が「前」になる。

(6) もっと前の方に座ろう。

(7) もっと後ろの方に下がろう。

(8) （話し相手に向かって）もっと前に出てください。

(9) （話し相手に向かって）もっと後ろに下がってください。

すなわち「前、後ろ」には参照点を持たない直示的な用法も存在するのである。直示表現では、「発話時」の「話者（＝自分）」が発話の中心点として機能する。それは日本語の「内（うち）」と「外（そと）」という表現とも共通する。「内、外」は何も参照点が示されなければ直示的な表現となり、何らかの参照点が示されると参照的な表現となる。

次節では「前、後ろ」の空間的な用法から時間的な用法に考察を進める。

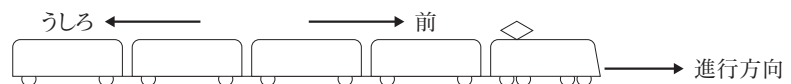
3 「前（まえ）」と「後（あと）」

前節では空間的な「前」と「後ろ」を検討したが、時間的な意味で用いるときには「前（まえ）」と「後（あと）」という表現になる。「後（あと）」は「足跡（あしあと）」や「傷跡（きずあと）」に現れる「跡（あと）」が語源となる。すなわち過去に残してきたものの痕跡を意味し、そこから時間的な意味に発展してきたのだと考えられる。

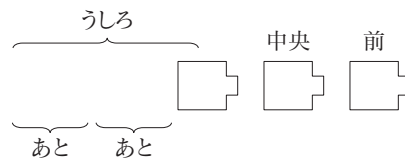
森田（1989）は空間的な「あと」の意味を次のように説明している。

- (10) 連鎖状のものを順に「前／中央／うしろ」と部分に区分けするわけであるが、右例（＝〔図4〕）のように「前／うしろ」は無限に両方向に繋ぎたしていける可能性をもつ。この場合、新たに続いていく「うしろ」の余地を「あと」とも言う。

■図3 前とうしろ



■図4 うしろとあと



森田（1989：1047）

そして、「新たに続いていく『あと』」の例として次の文を挙げている。

- (11) われと思わん者はあとに続け。
(12) 子分をあとに従える。

空間的に次々に生起するものは「そのあとに」で表現できる。そして前方に生起するものは「その先（さき）に」で表すことになる。

- (13) 岬まで歩いて行ったその先に、何があるのだろう。

本来は「後先（あとさき）」という表現があるように、「後（あと）」の対の言葉は「先（さき）」であったと考えられる。しかし、「先」は主に空間的な意味で用いられる。時間的な表現では、「前（まえ）」と対になり「前に、後で」という表現が対になったのであろう。

時間的な「前に」と「後で」は、しばしば「～の」という表現と共に、それが参照点と機能する参照的な表現になる。また修飾句としての節が先行する場合、その節が参照点となる。前述の図1で示されるように話者が概念主体◎となり、「～の」もしくは修飾節で示される参照点を通じて「前、後」の事態を表現するのである。表現される事態は未来のこともあるし、過去のこともある。

- (14) 明日、昼ご飯の前に／後で、先生に会う予定です。
(15) 昨日、昼ご飯を食べる前に／食べた後で、先生に会いました。

これらの表現では「昼ご飯」「昼ご飯を食べる／食べた時」が参照点となっている。英語の before と after に対応した表現であると言える。

しかし参照点が提示されない場合は直示的な表現になる。

(16) その先生には前に会ったことがある。

(17) その話は後でしょう。

直示的表現では「話者」の「発話時」が「前／後」を分ける点になる。ちょうど英語の ago と later に対応する。

この節では「前」と「後」の時間的用法に、参照的なものと直示的なものがあることを述べてきた。次節ではこれらの用法の違いが「時間がどう流れるか」に関連することを論じる。

4 時間はどう流れるか

瀬戸（2017）は時間を水の流れのメタファーで説明している。

水は上流から下流に流れる。従って上流は「過去」、下流は「未来」を表すと解釈できる。このことは次のような表現にも反映している。

(18) 三月上旬／三月下旬

また中国語でも「上」が過去、「下」が未来という対応が見られる。

(19) 上（个）星期（先週）／下（个）星期（来週）

そして流れる川にたとえられる時の流れは「動く時間」と定義し、次のようなイラストでイメージを表している。

■図5 瀬戸（2017）の「動く時間」



このイラストによると時間は未来から過去に向かって流れることになる。さらに瀬戸は図を次のように説明している。

- (20) 図2 [図5] は人がある点にとどまって時間の流れを観察する状況を表す。時間は未来からやってきて過去に過ぎ去る。たとえばもうすぐ夏休みがやって来ると言う。来るという表現は話者に近づくことを意味する。行くはその反対だ。

瀬戸 (2017 : 41)

つまり、前述の図1©の概念主体のように、人は時間の流れを見ていることになる。その場合、時間の流れの中に参照点を設定して時間の前後関係を記述することになる。

このような状況では過去は「前」、未来は「後」で表現される。話者は観察者として時間の流れの外にいて静止している。出来事を観察し、参照点を設定することが容易に行われる。参照点と共起する「前」を使った表現は、その事態より過去を表し、参照点と共起する「後」を使った表現はその事態の未来を表す。しかし、主節の時制により文そのものが過去の出来事を表す場合もあれば、未来の出来事を表す場合もある。

- (21) パリ旅行の前に／後で、新しい鞆を買おう／買った。

瀬戸によると、時間は未来から現在に向かって「やって来る」ことになる。確かに未来を表す表現には「来週、来月、来年」のように「来る」を用いた表現が多い。日本語以外では、スペイン語でも次のような表現がある。

- (22) la semana que viene (来る週＝来週)

- (23) el mes que viene (来る月＝来月)

- (24) el año que viene (来る年＝来年)

そして過去を表す場合は「去年」のように「行ってしまった月」と表現する。

英語においても、ago の a- は強意の接頭辞で「すっかり」を意味し、go は gone (goの過去分詞) の古形で「行ってしまつて」を表すと言う(瀬戸 2017 : 109)。

しかし「来る」「行く」を使った次のような文では「来る」は過去を、「行く」は未来を表している。

- (25) 知らず知らず歩いて来た 遠く長いこの道

(美空ひばり『川の流れのように』)

- (26) 力抜いていこう いつもの通り

でも上げていこう! 夢見てた通り

(Dreams Come True『OLA VITORIA!』)

この点に関し瀬戸 (2017) は次の図6のようなイラストを示し、「動く自己」という観点で説明を加えている

■図6 瀬戸（2017）の「動く自己」



(27) (上述の) 図2 [図5] は人が動かず時間（の流れに乗った出来事）が動くのに対して、図3 [図6] は時間が動かず人が動くことを表す。人が未来に向けて一步一步踏み出す図である。未来は人の前方にあり、過去は人の背後にある。それゆえ私たちは過去の出来事をときどき振り返ることになる。

瀬戸（2017：41-42）

この状況は発話者が出来事の流れの中に身を置き、直示的に「前」と「後」を表現していると解釈できる。主体の視線の向かう方向が「前」になり、これは未来を表す。主体がすでに通った時間は「後」になる。

瀬戸（2017）は、このように「動く時間」と「動く自己」という観点で時間の流れを説明し、「前」と「後」の意味を考察した。認知言語学の観点からも同様の考察が見られる。山梨（1995：114）は、時間がわれわれに向かってきて通過していくという視点からみた例として、次のものを挙げている。

- (28) 1. a. 次の誕生日がきたら、盛大にお祝いしよう。
b. 来る5月17日にコンサートを予定しています。
2. a. いよいよ年の瀬が近づいてきた。
b. ついに借金の返済日が迫ってきた。
3. a. 過ぎ去った日々を懐かしんでいる。
b. もう過ぎてしまったあの日のことは忘れよう。

これに対して、われわれが時間に向かって移動していくという視点をとる例として、次のようなものを挙げている。

- (29) 1. a. 素晴らしい未来に向かって進んでいく。
b. これまでの過去を振り返ってみる。
2. a. 君には素晴らしい未来が待っている。
b. あなたの前には、すてきな未来が開かれている。

本研究ノートではこれら二つの視点を、「参照表現」としての「前・後」、「直示表現」としての「前・後」と言い換えて考察を試みた。前者の場合、話者は「時間の流れ」を外から観察する立場にあり、参照点の設定を行うことができる。後者の場合は、話者は「時間の流れ」のまっただ中に置かれ、未来

へ向かって進んでいくという視点をとる「直示」表現であると見なすことができるのである。

5 「動く時間」と「動く自己」の合体

山下（2016b）で「参照表現」と「直示表現」は重ねて使われる場合があることを指摘した。

- (30) 今日は（借金10000円のうち）3000円だけ返す。（全体を参照点とする参照表現）
- (31) 今日は3000円しか返せない。（直示表現）
- (32) 今日は3000円だけしか返せない。（参照表現と直示表現の併用）

瀬戸（2017）では、前節で述べた「動く時間」と「動く自己」が認識上矛盾なく合体することを以下の図を示して説明している。

■図7 「動く時間」と「動く自己」の合体



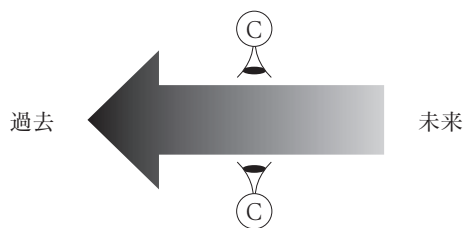
そしてその例文として次のようなものを挙げている。

- (33) 大会が近づいてきたのでそろそろ準備を進めなければならない。
- (34) I am going to graduate this coming spring.

「大会が近づいてきた」と“this coming spring”の部分は「動く時間」を表す。「準備を進める」と“be going to graduate”の部分は「動く自己」の行為を表す。前節で述べた二つの見方が合体しているのである。

さらに瀬戸（2017）は、認識主体が時間経過の中でどのように位置づけられるかを考察している。以下の図の◎は認識主体（図1の概念主体）を示す。

■図8 「動く時間」と認識主体◎の位置（その1）



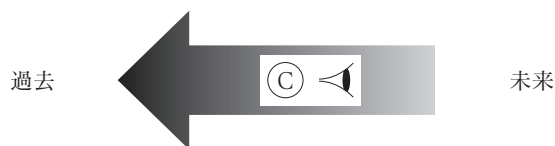
この場合、認識主体は時間の流れの外から、その流れを客観的に観察していることになる。この場合、認識主体は容易に参照点を設定することが出来る。

(35) 忘年会の前にクリスマスパーティーがあった。

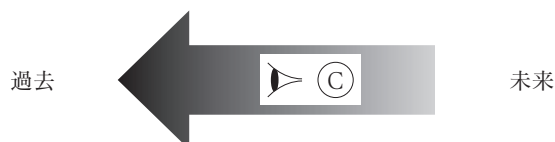
(36) 選挙の後で首班指名があるだろう。

主体認識が時間の流れの中にある場合は、次の二つの視点が可能である。

■図9 「動く時間」と認識主体◎の位置（その2）



■図10 「動く時間」と認識主体◎の位置（その3）



これらの視点は「発話者の発話時点」を基準とした直示的な表現を示す。瀬戸（2017）は、日本語の場合、図9のような視点を取ると主張しているが、場合によっては図10のような視点を取る場合もあるのではないだろうか。その例として「先（さき）」という表現がある。

(37) 先のことは分からないから、慎重に進めていこう。

この場合、「先」は未来を表し、図9のような視点で発話していると見なすことができる。

しかし「先」が過去を表し、図10のような視点で使われることがある。

(38) 彼は先に行った。私は後から行こう。

これらの例の「先」は音声的に同様に発音されるが、視点の違いを音声的アクセントを用いて区別することがある。

(39) 先の選挙で大勝した自民党（「先」の「さ」にアクセント）

(40) 希望の党の登場で先の見えなくなった自民党（「先」にはアクセントなし）

さらに「先（さき）」にアクセントと促音を加えた「さっき」という表現では、図10の視点に立った直示表現としてしか用いられない。

(41) さっき、先生が出て行った。

以上、時間の流れの見方によって、参照的な表現と直示的な表現があることを見た。参照的な表現では、参照点を過去の一時点にも、未来の一時点にも設定できる。さらに直示的な見方には、未来の方を向いたものと過去の方を向いたものがあることを見た。最後の節では、これらの見方が実際の語学学習にどのように応用できるかを見る。

6 日本語教育での実例とまとめ

初級日本語教科書『みんなの日本語初級Ⅰ』に次のような練習問題がある。

(42) 「前」を使った初級日本語の練習問題

8. 例：この薬を飲みます（寝ます）→いつこの薬を飲みますか。
……寝るまえに、飲みます。

- 1) ジョギングをします（会社へ行きます）→
- 2) そのカメラを買いました（日本へ来ます）→
- 3) 資料をコピーします（会議）→
- 4) 国へ帰ります（クリスマス）→
- 5) 日本へ来ました（5年）→
- 6) 荷物を送りました（3日）→

スリーエーネットワーク編『みんなの日本語初級Ⅰ第2版』p156

一見すると簡単な問題に見えるが、実はこの練習には2種類の表現が混在している。つまり、1) から4) までは参照点を設定した参照表現としての「前」であるのに対し、5) と6) は発話の現在から見た直示表現としての「前」が出題されているのである。5) と6) の答えはそれぞれ「5年前」「3日前」となり、参照点である「～の」という表現とは共起しない。

管見ではこのような異種の「前」の用法を単一の練習問題で出題するのは

学習者にとってプラスにはならない。参照表現と直示表現というのは英語の before, after と ago, later という類語表現にも見られることから、日本語教育にもその観点を取り入れてもいいのではないだろうか。

さらに助詞「の」の使用も参照表現と関わっている。上記3)、4) では「～の」と言う表現と共起する名詞句が参照点となっている。この「の」という助詞の有無が、表現に違いをもたらす例がある。たとえば、「私の家」と「我が家」、「北海道の大学」と「北海道大学」は参照点の有無でその違いの説明が可能なのではないかと思う。

今回の論考では、話者がある時間の流れの外にいる場合は「参照点」を設定しやすく参照表現になり、時間の流れの中にいる場合には「参照点」を設定しない直示表現になる現象を考察した。この見方は他の言語現象にも応用できるものであり、今後別の分野でも考察を進めていきたいと考える。

参考文献

- 辻幸夫編（2013）『新編認知言語学キーワード事典』研究社
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
大野晋（1978）『日本語の世界』朝日選書
瀬戸賢一（2017）『時間の言語学』ちくま新書 1246
スリーエーネットワーク編（2012）『みんなの日本語初級Ⅰ第2版』スリーエーネットワーク
寺村他編（1987）『ケーススタディ日本文法』おうふう
山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房
山下好孝（2016a）「直示と参照に基づく日本語指示詞の再検討」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』23巻、pp51-62
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/62975>
山下好孝（2016b）「直示と参照に基づく「だけ」と「しか～ない」の意味解釈」『北海道大学国際教育研究センター紀要』20巻、pp93-102
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/65698>

（平成29年10月30日受理、平成29年11月22日採択）